

活字をはみだすもの 第27回

「山陰土産」原稿に見る島崎藤村“新規まき直し”の旅の構想

講師 栗原 悠 先生

◇開催 6月20日(土) 13:00~14:00

1928年、島崎藤村は畢生の大作「夜明け前」執筆準備のために舞台となる木曾の現地取材に向かいます。その前年、次男・鶏二を伴って初めて訪れた山陰地方についての旅行記「山陰土産」は、小説ではないものの、「夜明け前」やそれまで書き継いできた心境小説と響き合うモチーフが多く見出されます。原稿の修訂からそうした創作における思考の痕を探っていきたいと思います。

【講師紹介】国文学研究資料館／総合研究大学院大学准教授、1987年生。島崎藤村を中心に、文学と同時代社会思想の接点を研究テーマとしている。また、文化資源としての近代文学資料にも関心を持っている。著書に『島崎藤村と創作の論理』(有志舎、2026)がある。



耽美とミステリーの懸け橋 —翻訳家・谷崎潤一郎の苦心

講師 河野龍也 先生

*本講座の内容は、前回やむなく中止となったものです。

◇開催 6月20日(土) 15:00~16:00

「阿片溺愛者の告白」に代表されるトマス・ド・クインシーの著作は、オスカー・ワイルドと並んで、谷崎潤一郎・佐藤春夫ら大正期の耽美派文学に対する偉大な教科書の役割を果たしました。昭和初期のエロ・グロ・ナンセンスの時代にも脚光を浴び、谷崎は「芸術の一種として見たる殺人に就いて」(『犯罪科学』昭和6年3月~6月未完)を自ら翻訳しています。耽美とミステリーを架橋した名訳の舞台裏の苦心を、自筆の訳稿から探ります。

【講師紹介】東京大学准教授、1976年生。佐藤春夫を中心に、美術と文学ジャンルの交流や作家の異文化理解に関心がある。著書に『佐藤春夫と大正日本の感性』(鼎書房、2019)、編著に『知られざる佐藤春夫の軌跡』(武蔵野書院、2022)、『佐藤春夫読本』(勉誠出版、2015)など。



堀辰雄 葛巻義敏宛葉書を読む

講師 中澤 弥 先生

◇開催 6月27日(土) 13:00~14:00

堀辰雄が葛巻義敏に宛てた1930年代の葉書を取り上げる。葛巻義敏は、芥川龍之介の甥として知られており、芥川没後は遺稿の整理・保管にたずさわった。堀辰雄とは共に芥川龍之介全集の編集に当ることになる。その一方で葛巻は創作を試み、「四季」「青い馬」等の雑誌に小説を発表している。二人はたがいに競い合う文学仲間でもあった。葉書という狭小な場から二人の関係を探っていく。

【講師紹介】多摩大学名誉教授、1959年生。文学と美術・映画などとの交流を主な研究テーマとする。また、横光利一など租界都市上海における日本人作家の活動にも興味を持つ。



作品の「本文」を考える —『全集』の「本文」に頼ることの危うさについて

講師 庄司達也 先生

◇開催 6月27日(土) 15:00~16:00

「全集の本文」とは、ナニモノなのでしょう。多く出版されている『全集』という刊行物について考えた時、そこに載る「本文」というものが大いに気になっています。皆、等しく「全集本文」と呼ばれてはいますが、その出自はさまざまです。『全集』の編集に関わる書簡を幾通か取り上げ、そして、所謂「元版全集」と呼ばれている『芥川龍之介全集』(岩波書店、1927~'29)の「未定稿」の「本文」を例にして、『全集』の「本文」というモノを見つめ直します。

【講師紹介】横浜市立大学教授、1961年生。芥川龍之介の〈人〉と〈文学〉を主たる研究テーマとし、出版メディアと作家、読者の関係にも関心を持つ。また、作家が聴いた音楽を蓄音機とSPレコードで再現するレコード・コンサートを企画・開催。著書に『100年読み継がれる名作 芥川龍之介短編集』(監修、世界文化社、2024)など。



2026.5.27 開設

※参加費無料 参加ご希望の方は左記 QR コード、または別紙申込書をご覧ください。 (2026.5.20)

八木書店 古書部 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-1-7 営業:10時~18時 定休:日祝
TEL 03-3291-8221 FAX 03-3291-8223 <https://catalogue.books-yagi.co.jp/> <mailto:kosyo@books-yagi.co.jp>